

みんなのデジタルリポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

モンゴルの春：人類学スケッチ・ブック

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2012-02-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小長谷, 有紀 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/4579

6 宅配便ではこぼれた双子ヤギ

第六日め（三月二十一日）

チョルム姉さんの家でむかえた朝。曇天。強烈な西風がふきつけている。さむい。となりですむ姪たちが、朝はやくから彼女のもとにきている。みんな一緒に朝の乳茶をのむ。けさしぼった牛乳がつかわれている。それから一息ついて、チョルム姉さんは茶碗をあらう。戸内を掃除する。そして、一人ずつ姪たちの髪をゆう。いつも、たぶん、こんなふうだろうと思う。客がいるからといって、きどった様子はない。

午前十時頃、水色にかがやく民族衣裳をきた若者がウマにのってちかづいてくる。チョルム姉さんのところでウマからおりた。フェルトの袋をかついでいる。袋をかついだままゲルのなかにはいる。袋はけっこう重そうにみえる。それをチョルム姉さんは、なにもいわずにうけとった。中身については先刻承知とばかりに、袋ごとうけとって、さっさと中身をとりました。袋からでてきたのは二匹の子ヤギ。子ヒツジ・子ヤギの宅配便である。

フェルトの袋は、ラクダの毛をよりあわせた糸でさしがほどこざれている。紐もラクダの毛でできている。この袋をオートという。今日、オートといえは、あらゆる袋を総称しうるが、本来のオートとはこのように子ヒツジ・子ヤギを運搬するためのフェルトの袋をさした。放牧地にでた群れのなかで誕



子ヤギの宅配便

生した子ヒツジ・子ヤギを所有者のもとにとどける袋である。

チョルム姉さんは、きょうの日に一頭のヤギが出産することを予知していた。そのヤギの乳房のはり具合で推測するという。しかも、双子出産であろうと予測していた。そのヤギは毎年双子をうんできたという個体史から推測するという。宅配されるだろうとも予想していた。そのヤギは毎年双子の片方をじゃけんにあつかうという性格判断から、あらかじめ子を宿营地にとどけてしまえば簡単だという。そんなわけで、宅配便が到着したとき、チョルム姉さんはもうなにも宅配係に質問することがなかった。

宅配してきた若者の名はスチンバータル。モージ母さんにとって、姪の婿にあたる。正確にいうと、モージ母さんのいちばん上の姉さんの夫の妹の養女の、夫ということである。血縁はないが、姪に相当する娘の夫であることはたしかだ。しかも、彼の姉は、ジャンバルドルジの現在の妻でもある。つまり、スチンバータルは、老夫婦にとつ

	昼間出産	夜間出産	合計	昼：夜
ヒツジ	60	56	116	52：48
ヤギ	37	24	61	61：39
合計	97	80	177	55：45

表3：昼夜出産比率

て長男の嫁の弟で、チョルム姉さんにとっては兄嫁の弟になる。スチンバル夫妻とジャンバルドルジ兄さん夫婦はひとつところに宿営している。かりに東家の二戸とよんでおこう。チョルム姉さんのいる南家の二戸は、東家の二戸と共同放牧している。ヒツジ・ヤギの群れをまとめて、輪番態勢で放牧する。各戸から一人ずつ放牧担当者がでて、一週間ずつで交代、四戸で四週間、ちょうど一ヶ月で一巡という体制。したがって、スチンバルは、チョルム姉さんにとっていわば共同管理者にも相当する。今週の放牧担当者として、宅配業務を遂行したのである。

南家でも、そろそろ出産シーズンがはじまろうとしていた。時期はおおよそコントロールされているものの、出産の時刻までをコントロールすることはできない。昼間、放牧地あるいはそこへの道中で生まれるか、夜間あるいは朝方、宿営地付近で生まれるか、だれにも操作できない。

夜間、宿営地付近で出産があることを人びとはねがっている。交尾期になると種オスのヒツジ・ヤギをメスの群れと合同させるが、「夜間に合同すれば、夜間に出産する」といういいつたえもあるほどだ。しかし、夜間に出産があるとはかぎらない。夜間と昼間はほぼおなじ確率で出産する。昼間すなわち放牧地での出産があれば、対処方法には二つある。一つはオートをもちいた「宅配方法」。もう一つは、母子をベアで草原から連れ戻す方法。後者を

かりに「母子とり方法」とよんでおこう。
きのうのことであった。チョルム姉さんとバトビリグ少年と一緒に、草原



はこばれてきた子ヤギ

にうみおとされた子ヤギをひろいにかけてのだった……。

「わが家の男どもは、なまけものだよ。まったく。道中見かけて知ってるんだから、連れて帰ってくれればいいものを……」

と、チョルム姉さん。男たちは、放牧の仕事以外にもあちらこちらへとウマをはしらせている。その道中で出産した母ヤギとその子を見かけているのだから、連れ帰ってもよさそうなんだ……彼女はその愚痴る。

彼女は、デルスの草原をずんずんとあるく。デルスとは背の高いハネガヤ草である。スキの原っぱに似ている。あるきにくい。そんなデルスの草原をずんずんとふみたおしていく。彼女の太ったからだは左右に大きくゆれる。目的のヤギがみあたらない。

「さっきまでこのあたりにいたのに、どこに行っただろ。ちょっと上にあがってみよう」

彼女は、ほんのすこし高くなっている方へあるきはじめた。シュルブルとよばれる鞭を杖がわりにしてあるく。ますますゆれる彼女のからだ。のっしのっしとからだをゆすりながら、彼女はそうなる原因を説明した。去年、ラクダからおちて右足の膝をいためたという。それ以来、杖をつくようになった。そうだ。

すこし高いところにてみると、南のゆるやかな丘の中腹あたりにヤギの母子がみえた。彼女は、「先に行け」

とバトビリグに命じる。少年は、寄宿通学せずに親のもとにとどまり、妹たちの面倒をみていた。しかし彼女にいわせれば、バトビリグ少年もまた怠け者の男たちの部類に属する。彼に対してきびしく命じるのは、彼女なりの教育的配慮といふべきものであった。

「走って、まわって来い！ 走れ！ 走れ！」

そう彼女は叱咤する。丘をゆっくりのぼっていかうとする少年に、さっさと走っていけと命じるのだ。一直線にヤギに向かつて最短コースを走ると、ヤギもまた向こうへ走っていつてしまふ。だから、少しまわりこむように走らなければならぬ。まわりこんで向こう側から、今度はこちらへ向かつてヤギを追うべきなのである。

少年はいかにもつらそうに、丘をすこし遠まわりしてかけのぼる。ようやく、ヤギの向こう側に到着した。そこからは、ヤギをこちらに向かつて追えばよい。母ヤギは、少年に追われて丘をくだるかに見えた。ところが、子ヤギのほうが母ヤギについていかうとしない。のこされた子ヤギが気がかりな母ヤギ。いったん丘をくだりはじめたのに、またふたたび丘をのぼって子ヤギのところへいかうとする。少年がまた母ヤギを追いかける。しばらくのあいだ、ヤギと少年のそんな追いかけっこがつづいた。これではちがあかない。いっこうにこちらへ近づくと気が配れない。

チョルム姉さんは、次の指示をあたえなければならぬ。

「子ヤギをつかまえろ。ついてくるから」

子ヤギを抱けと命じたのである。子ヤギを抱いて丘をおりてくれれば、母ヤギは自然についてくるという指示であった。いわれたとおり、少年はまず子ヤギをつかまえた。なるほど、母ヤギがついてくるようだ。しかし、それはほんの一瞬だった。子ヤギを抱いてさっさと丘をおりてくる少年。子ヤギを人にとられてしまった母ヤギは、わずかばかりついてくる気が配みせながら、人にはついてこようとする。少年と母ヤギの距離は遠くなるばかりである。さらに次の指示が必要となった。

「ええ？ 何だって？」

と何度もききかえず少年に、チョルム姉さんは、大声をはりあげて命じた。

「子ヤギを見せる」

さらにもう一度、

「見せるんだよ」

子ヤギを母ヤギに見せなければ母ヤギはついてこないというわけである。家畜はそもそもペットではない。群れにつきしたがう動物であって、人につきしたがう動物ではない。囲いなどのまったくない草原で、人につきしたがうわけではない動物を、群れの見えないなかで単独で、しかも歩いて追うのは、けっこうむずかしいことなのである。いま、子は抱きかかえて運ぶことができる。この子をおとりにすれば母ヤギを誘導することもできそうである。しかし、そもそも人についてくるようにつけられているわけではないから、子をおとりにしようと思うなら、はつきりと子をおとりに見せつつ、見せつつ、誘導しなければならないのである。

少年は、立ち止まり、ふりかえり、母ヤギに子ヤギを見せた。それは、ここにおまえの子がいるぞというしぐさであった。母ヤギが人にとられた子ヤギを意識していることは明瞭である。立ち止まる少年にすこし近づいてきた。子ヤギがメーとなけば、母ヤギはかならずついてくる。そこで、少年は丘をくだる。しかし、すこしついてきた母ヤギはまた立ち止まる。すると、少年もまた立ち止まって、ふたたび子ヤギを母ヤギに見せなければならぬ。ときどき母ヤギが立ち止まるたびに、子ヤギを見せる。子ヤギを見せて、子ヤギの声を聞かせて、はつきりと子をおとりにしたてるのだった。

少年が子ヤギを母ヤギに見せるとき、チョルム姉さんは

「チュチュチュチュ」

という音を発する。そうやって母ヤギをよんでいる。その声を聞いて、少年もまた母ヤギへよびかけた。子を見せ、子の声を聞かせると同時に、人がよびかけながら母を誘導するのである。



子（ヒツジ）をおとりにして母をみちびく

このように、母子とり方法は、子を拾い、子をおとりにし、母を誘導するという一連の作業を要する。かなり厄介である。とりわけ「子おとり」の過程で、ちょっとしたこつを要する。子を見せたり、子の声を聞かせたり、母によびかけたり、という作業手順である。丘にいるヤギに少年が到着した地点から、チョルム姉さんが命令を発していた地点まで、およそ百メートル。その間、十数回も子おとりのこつをくりかえした。

ふたたび、デルスの草原をふみわけて宿营地にもどる。背の高い枯れ草のなかで、子おとりはいっそう困難となった。母ヤギがデルスのなかへふみわけてこない。ついてこない。そのかわり、あちこち自由ににげまどうこともない。そこで、子ヤギを大地におろした。母ヤギのあとを子ヤギに追わせるように、背後から二頭を追った。さつきまで杖がわりにしていたシュールブルをもちいる。うしろから、子ヤギをかくつつついて追った。

デルスの草原をぬければ、家までもう近い。再度子おとりの要領で、石垣まで母ヤギを誘導。チ

ヨルム姉さんは最後の命令を発した。

「困いのなかにいれておけ」

母子とり方法にくらべて宅配方法は簡単である。生まれた子をひろいあげて袋にいれて、もってかえってくるだけ。しかし、欠点もある。子畜育てにとってもっとも重要な、母とのきずながよめられるかもしれない。出産直後、母が子をなめてよく面倒をみていけば、実母子関係が確立されて、しばらくひきはなしても大丈夫。宅配されて一足先に宿営地にもどった子ヒツジ・子ヤギは、放牧した群れがかえってきたとき、群れのなかにまじっていた母と対面することができ。しかし、そのとき母がわからなくなるかもしれない。あるいは、母が子を見とめなくなるかもしれない。実母子関係が確立するまえに急いで子を袋にいれたり、たくさんの子を袋につめこんで匂いがまじってしまったり、という危険がある。

そこで、宅配方法よりのぞましいのが母子とり方法である。母子を一緒につれもどすから、母子のきずなをよわめない。宅配方法が採用されるとすれば、それはつぎのような場合である。出産場所が宿営地からかなり遠いと判断される場合、悪天候の場合もしくは天候の悪化が予想される場合、双子のように実母子認知関係が不安定な場合など。つまり、母子とり方法が不適當なときに宅配方法が採用される。

ヤギでもヒツジでも、母となったものは子がついてくるまで出産の場所をたちさろうとしない。子さえいなければ、できるだけ群れの移動についていこうとする。ところが、いったん母となり、子をもつ身になると、子がついてくるまでは群れの移動に少々おくれざるをえない。日帰り放牧の途中で出産した場合、しばしば母子が群れからとりのこされることになる。

出産のために草原で群れから逸脱する母子。このペアを、群れ本隊とは別に宿営地にもどすのが母子とり方法。その一連の作業には、前提条件として、まず実母子の認知関係が確立していなければならぬ。母と子のきずながしっかりしていないと、子をひろって母をよびよせることができない。その条件がみたされているとき、母と子のきずなをいかすこと、これをこわさないこと、そこに母子とり方法の特徴がある。子をひろい、その子をおとりにし、母を誘導する。野生動物の群れに近づいていた人が、はじめて家畜化の契機をつかんだシーンは、こんな光景だったかもしれないと思わせる。

やがて、毎日こんな光景がつづくようになる。春のきざしがみえてきた。

そんななかで、まさか、ダンゼン家で事件が発生しようとは思いませんでした。